

第1回「人工知能と人間社会に関する懇談会」資料

1. AIR(Acceptable Intelligence with Responsibility)の活動 (2014-)

・人文・社会学者、人工知能研究者と、両者を有機的に結びつける科学技術社会論や科学コミュニケーションを専門とする対話基盤設計グループを設け、政府による干渉や産業による利益誘導に左右されない、異分野間の対話・交流を促すための媒体や基盤をボトムアップで構築する。また、対話を通して、人工知能の目指すべき共通アジェンダや社会の未来ビジョンを設計し、技術開発・実装時の新設計基準や規範・倫理・制度に関する価値観を提案することを目的とする。(http://web4ais.wpblog.jp/)

- ・「対話」に必要なこと：信頼関係の醸成と、言葉の概念や定義、目的の吟味。
 - 何を対象に、どのくらいの時間軸で、誰にどのようなメッセージをなぜ出したいのか。
 - 「議論」より前に、言葉の意味のすり合わせと、合意形成の設計論が重要。

2. 言葉の定義や目的

- ・「人工知能」とは何か。
 - 「まだ見ぬもの」「体系化にいたっていない」フロンティア精神にあふれた基礎研究。
 - 「気づかれないうちに浸透している」ことを目的とする実用化研究。
- ・どのような「価値」や「社会」を実現させたいのか、どのような意味や解釈が可能なのか。
 - 安全・安心・公正・正義・公平・利便性・誠実・効率・自由・幸福 etc
 - どの「価値」を設計に落とし込むのか/込めるのか、価値の対立調整はどのようにするのか。
 - 具体例から見ていく必要がある。

3. AIRの調査方法

- A. オーラルヒストリー調査：第2次人工知能ブームに身を置いていた先人たちへのインタビュー
 - 過去の異分野協同研究体制や政策から針路を考え、共通言語を構築。
- B. アンケート調査：どこまでなら何を機械に任せたいか
 - 10年後の運転、育児、介護、人生選択、健康管理、創作活動、防災、軍事を研究者や一般、創作活動関係者など複数のステイクホルダーにアンケート調査。
 - 「機械だから安心」「人間だから安心」など同じタスクに対しても異なる信頼感。
- C. 現場見学・インタビュー調査：ロボットと人間の共存
 - 「生産性を高める」、「消費者の満足度を高める」、「環境負荷を低減する」、「安全性を高める」、「ユーザーの利便性を高める」、「公平性を確保する」など個別事例や対象によって求める「価値」が異なると、設計・導入・使用される技術や整備される環境や資源（人・技術）の配分も異なる。
 - 現場の文脈、社会状況や目的に応じて、人と機械の関係性モデルがどのように作られているか。またそれが想定から外れたときの調整はどのように行われているか。